

本当の幸せを考えるなら食と農を大切にしよう

エコセンターの畑を拠点に荒川版「食と農の祭典」を

都市の住民が「食」と「農」を身近に感じる必要がある。区民の実行委員会形式で、畑での農作業や収穫物の試食、区に行く、生ごみのたい肥作り、緑のカーテンやベランダ菜園講習会の情報提供、区民が実践している自宅などでの農、援農、生産者との交流、産直や安全な農産物を扱い、食べられるお店の紹介など、さまざまな企画が考えられる。健康づくり、地方との交流、産業振興、消費者そして環境問題など、さまざまな分野が関連する「食と農の祭典」を展開することで新しい出会いが生まれるだろう。

区：関係部署と調整して検討していきたい。



縮小社会研究会で「ガンジーの思想と実践」を考えました

インドのガンジーは非暴力主義で有名です。「非暴力」の実現を希求すると同時に、ガンジーの提唱した「身の丈にあった経済」を人口減少の日本の今後にあてはめてはいかがでしょうか。ひたすら経済成長を追い求めるのではなく、拝金主義をやめて、本当の幸福を追求したいものです。

女性が輝く 社会に向けて



ジェンダー（社会的差別）の視点とは「性差別、性別による固定的役割分担、偏見等が社会的に作られたものであることを意識していこうという視点」（内閣府）。様々な課題に男女の割合、状況がどのように影響しているかを分析し、差別をなくしていくこと＝ジェンダーの視点をもつことが重要である。

職員配置にジェンダーの視点を

防災課職員は女性がたった一人～阪神淡路大震災でも、東日本大震災でも大問題になった避難所での女性の困難な状況やお年寄りや子どもの大変さへの配慮は女性が防災の担い手になることの必要性を示している。

そもそも、組織の中で、多くの男性に囲まれ女性が一人で行動することの大変さを考慮すべき。避難所訓練で、救護班に女性が一人も配置されていなかったのを指摘しても女性は炊き出しでがんばっているからいいんだという議会答弁が出るのが荒川区の現状である。区役所の人員配置をジェンダー視点から見直すべきではないか。

区：ご指摘の点も含め、検討したい。

「指導的な立場の女性を2020年には30%に」という国の方針について区の見解は？

区：現在、区の審議会の女性割合は18.9%だが、区としても国の動向に歩調をあわせ、努力していく。

(1 pから続く)

認知症カフェは、現在、公園となりの障害者グループホームピアホームの1階ホールで日曜カフェとして、高齢者も障がい者も子どもも集える居場所になりました。(10 - 15時)母は、子どもと遊び、昼食の野菜を刻んだり、食器洗いをしたり、できることで手伝ってくれます。この、楽しみがある、役割があることが、認知症の人には大切なのです。

